

過越の食事をする

(マタイ 26: 17-30)

¹⁷ 除酵祭の第一日に、弟子たちがイエスのところに来て、「どこに、過越の食事をなさる用意をいたしましょうか」と言った。¹⁸ イエスは言われた。「都のあの人のところに行ってこう言いなさい。『先生が、「わたしの時が近づいた。お宅で弟子たちと一緒に過越の食事をする」と言っています。』」¹⁹ 弟子たちは、イエスに命じられたとおりにして、過越の食事を準備した。²⁰ 夕方になると、イエスは十二人と一緒に食事の席に着かれた。²¹ 一同が食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」²² 弟子たちは非常に心を痛めて、「主よ、まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。²³ イエスはお答えになった。「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、わたしを裏切る。²⁴ 人の子は、聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」²⁵ イエスを裏切ろうとしていたユダが口をはさんで、「先生、まさかわたしのことでは」と言うと、イエスは言われた。「それはあなたの言ったことだ。」²⁶ 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」²⁷ また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆、この杯から飲みなさい。²⁸ これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。²⁹ 言うておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」³⁰ 一同は賛美の歌をうたってから、オリブ山へ出かけた。

最後の晩餐

(ヨハネ 13: 1-38)

¹ さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。² 夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。³ イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、⁴ 食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。⁵ それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。⁶ シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。⁷ イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。⁸ ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。⁹ そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」¹⁰ イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いのみだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」¹¹ イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。¹² さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。¹³ あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。¹⁴ ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。¹⁵ わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。¹⁶ はっきり言うておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。¹⁷ このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。¹⁸ わたしは、あなたがた皆について、こう言っているのではない。わたしは、どのような人々を選び出したか分かっている。しかし、『わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった』という聖書の言葉は実現しなければならない。¹⁹ 事の起こる前に、今、言うておく。事が起こったとき、『わたしはある』ということ、あ

あなたがたが信じるようになるためである。²⁰ はっきり言うておく。わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」²¹ イエスはこう話し終えると、心を騒がせ、断言された。「はっきり言うておく。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」²² 弟子たちは、だれについて言うておられるのか察しかねて、顔を見合わせた。²³ イエスのすぐ隣には、弟子たちの一人で、イエスの愛しておられた者が食事の席に着いていた。²⁴ シモン・ペトロはこの弟子に、だれについて言うておられるのかと尋ねるように合図した。²⁵ その弟子が、イエスの胸もとに寄りかかったまま、「主よ、それはだれのことですか」と言うて、²⁶ イエスは、「わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だ」と答えられた。それから、パン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダにお与えになった。²⁷ ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った。そこでイエスは、「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」と彼に言われた。²⁸ 座に着いていた者はだれも、なぜユダにこう言われたのか分からなかった。²⁹ ある者は、ユダが金入れを預かっていたので、「祭りに必要な物を買いなさい」とか、貧しい人に何か施すようにと、イエスが言われたのだと思っていた。³⁰ ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった。³¹ さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。³² 神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。³³ 子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行く所にあなたたちは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言うておく。³⁴ あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。³⁵ 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」³⁶ シモン・ペトロがイエスに言った。「主よ、どこへ行かれるのですか。」イエスが答えられた。「わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることにはできないが、後でついて来ることになる。」³⁷ ペトロは言った。「主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます。」³⁸ イエスは答えられた。「わたしのために命を捨てると言うのか。はっきり言うておく。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう。」

最後の晩餐

190 第一日

真夜中の第一観想は、我が主キリストがエルサレムに向けてベタニヤを出発されたところから、最後の晩餐迄の事であり(298)、準備の祈りと三つの準備、及び六つの要点と一つの対話を含む。

準備の祈り いつもの通りにする(46)。

191 第一の準備

内容をまとめる事。ここでは、我が主キリストが、晩餐を準備するために、ベタニヤから二人の弟子をエルサレムへ遣わし、後に主自身も他の弟子と共に晩餐に行かれたという事。又、過越の子羊を食し、晩餐を済ませてから、弟子たちの足を洗い、至聖なる体と尊い血を彼らに与え、そして、ユダが自分の主を売ろうとして出かけた後、彼らに説教をされた事。

192 第二の準備

見えるように場所を設定する事。ここでは、ベタニヤからエルサレム迄の道、それが広いか狭いか、平らであるか等を思い浮かべる。同様に晩餐の場所を見て、それが大きい小さいか、どのようなものであるかを思い浮かべる。

193 第三の準備

望んでいるもの願う事。ここでは、主が私の罪のために受難に赴かれるので、痛み、深く感じる心と乱れ悩む心を願う。

194 要点第一

晩餐に列席している人物を見る事。そして、自分に目を向け、そこから何らかの益を収めるように務める。要点第二彼らが話している言葉を聞く事。前と同じくそこから何らかの益を収める。要点第三彼らが何をしているかを見る事。そして何らかの益を収める。

195 要点第四

観想する場面に応じて、我が主キリストが人間として受けられており、又は、受けたいと望まれている苦しみを考察する。そして、ここから激しく痛みと悲しみを感じ、涙するよう務め始める。後に続く他の要点を通して又同様に努める。

196 要点第五

神性が隠されている事を考察する。すなわち、敵を滅ぼす力を持ちながらもそうされず、イエスのいと尊き人性がこれほどひどく苦しむままにされている事を考察する。

197 要点第六

主がこの苦しみを受けておられるのは、ことごとく私の罪のためである等と考え、私は主のために何をなすべきか、いかなる苦しみを忍ぶべきかを考察する。

198 対話

我が主キリストと対話し、主祷文で終わる。

199 注意

前にも一部記したように、対話においては、その靈操の内容に応じて話をし、恵みを願わなければならない。例えば、誘惑か慰めを感じるところに従い、獲得したい善徳、あるいは心を傾けたいあれこれの方向に従って、又、観想の内容につき苦しみか喜びを感じたいところに応じて、対話の次第を決めるべきである。最後に、具体的な事柄については是非とも望んでいるものを願う。こうして、我が主キリストへ一つの対話だけでも良く、又は、内容と信心深さによって動かされるようなら、聖母と御子と御父へ三つの対話を行う事もできる。方法は、第二週の「三組の人」の黙想(156)と同じ形であり、それに続く注意も守るべきである(157)。

289 晚餐

マタイ 26・17-30、ヨハネ 13・1-38 (マルコ 14・12-26、ルカ 22・7-38) 参照

要点第一

十二人の使徒と過越の小羊を食された。彼らに自分の死を予告された。「『あなた達によく言うておく。あなた達の一人が私を裏切ろうとしている』」。

要点第二

聖ペトロから始めて、弟子達の足、ユダの足まで洗われた。主の高貴な身分と自分の卑しさを考え、承知しなかった聖ペトロは「『主よ、私の足を洗って下さるのですか』」と言った。但し、それによってキリストが謙遜の模範を与えた事が聖ペトロには分からなかった。それゆえキリストは、「『あなた達が私のした通りにするよう、私は模範を示したのである』」と言われた。

要点第三

自分の愛の最高の印として、至聖なるいけにえである聖体を制定し、「『取って食べなさい』」と言われた。食事が終わった後、ユダは我が主キリストを売ろうと出て行く。